

# Clinical Practice at

## Johannes Gutenberg-Universität Mainz Medizin

From 29.4.19 to 24.5.19

### 実習場所・期間

実習はドイツの西南部に位置するラインラント・プファルツ州の州都であるマインツにある大学病院で行われた。マインツはドイツの主要空港であるフランクフルト空港から30分ほど。佐賀市と比較すると、人口は20万人と同程度だが、人口密度は4倍でコンパクトにまとまっている良い街であった。マインツ大学病院は病床数1600床、医師1000人以上が在籍する大規模病院である。そこで4週間、海外臨床実習を行なった。

### 参加者

佐賀大学医学部6年生 3人, マインツ大学の医学生, 海外からの Trainee Doctors  
他の期間には九州大学、鹿児島大学、東京医科大学などからも来ていた。

### 実習課題

今まで大学で学んできた医学知識・医学英語の実践と医療に対する考え方の違いを学ぶ。

また、将来、海外で活躍できる人材になるために海外のドクターとのコミュニケーション術と教養を身につける。

### 実習スケジュール (ドイツ語/英語)

1<sup>st</sup> week : Neurochirurgie / Neuro Surgery

2<sup>nd</sup> week : Urologie / Urology

3<sup>rd</sup> week : Gefäßchirurgie / Vascular Surgery

4<sup>th</sup> week : Allgemein Viszeral chirurgie / General Abdominal Surgery

今回、一緒に実習を行った同級生たちも同じ組み合わせだが、原則としてそれぞれ別の週に回った。しかし、日本での実習と違い、見学は1日10Pのみということはなく、上記の診療科であれば自由に移動する事が出来た。そのため1日で5つ以上のOPを見る事もでき、非常に幅広い実習を行う事が出来た。

## 実習報告

今回の実習では外来・病棟業務は見る事が出来なかったが、手術部のみに焦点を当ててみても、日本の病院実習で見てきたものと違う点を多々見る事が出来た。テーマとしては、日本と同様、ドイツでも地方の医師不足が問題となっているようで、物的資源・人的資源を増やし、医療者一人一人の負担を減らそうという方向に進んでいたように思う。

### 物的資源

#### ① OP 室の数

各診療科がそれぞれ OP 室を 3,4 部屋程度抱えており、さらに毎日が OP 日となっている。そのうち少なくとも2部屋は連日 OP で使用されていた。また血管外科などでは1部屋は緊急 OP 用に確保しておくなどといったルールもあった。

#### ② 麻酔導入室

各 OP 室の前に麻酔導入をするための部屋が用意されている。これにより、次の OP の準備をしている間に麻酔をかけて時間短縮をはかる事が出来る。



↑脳外科用の OP 室 3 部屋

### ↓脳外科 OP 室にある麻酔導入室



#### 人的資源

##### ① 麻酔看護師

ドイツでは麻酔看護師という役職があり、看護学校の中でも専門のコースを終えた人のみが就けるそう。このシステムにより麻酔看護師と協力しながら麻酔科医1人で複数の部屋を管轄する事ができるという。それでもマインツ大学病院には120人の麻酔科医が在籍しているそうで、力強いマンパワーを感じた。

##### ② 医師の数/医学部の定員

日本ではどこの医学部医学科も定員が一学年百人前後であるが、ドイツでは半年に250~300人程が入学する。そのため単純計算で医学部卒業人数は日本の5.6倍となる。実際に調べてみると、医学部を卒業したものの医師にならない人も数十%いるそうなので、人口千人あたりの医師数では日本は2千人、ドイツは4千人と倍ほどとなっている。

また、教育システムの面でも違いが見受けられた。

##### ① 早期看護実習

医学生は大学病院実習に入る前に他の病院で看護実習を数ヶ月行う事を課されている。さらにそれは、普段の授業とは関係なく長期休暇中に自分で受け入れ先を見つけてアプライする必要がある。この経験を持って臨床実習に入る事でスムーズに病院に慣れることが出来るようである。

## ② 外国人 Trainee の受け入れ

私が実習していた1ヶ月の間だけでも、他の EU 諸国から来ていた麻酔科医や消化器外科医に出会った。我々実習生も含め、マインツ大学はそういった受け入れに寛容なようである。そこではやはり、英語でコミュニケーションをとっており、実習を受け入れる方もかなりの日常英語・医学英語のレベルを要求される環境に身を置く事で自然と身に付くようである。また、私が感じた雰囲気としては臨床だけでなくアカデミックに活動し有名になっている診療科ほど、やはり受け入れが盛んであり英語が堪能であった。

## 現場の医療について

佐賀大学とマインツ大学はお互いに地方医大病院として、提供している医療は概ね同じであるように思われた。各診療科について比べてみると、マインツ大学の血管外科は名前の通り、心臓自体を扱うことは無く、主に大血管系のステント術や血栓除去術を行っていた。泌尿器科では Circumcision(包茎手術)や Penile Cancer(陰茎癌)など日本ではあまり見る事がなかった症例も頻繁に扱っていた。一般外科では肝臓外科が有名だそうで OP 室 4 部屋中 3 部屋が肝臓の手術だった日もあった。また、お目にはかかれなかったが肝臓移植も行なっているそう。

全科に共通して言える気付きとしては、開創範囲が日本よりも 1.5 倍ほど広がった。体格の良い患者さんが多く、先生方の手も大きいからであろうか。また、清潔野の基準が日本と比べて寛容で非常に近くで OP を見学する事が出来た。

さらに、保険制度についてはプライベート保険というものがあり、国民皆保険より上位の任意保険である。これを持った患者さんは原則的に上の先生が執刀するという決まりがあり、同じ術式でも診療報酬も上がるとのこと。このような患者さんにはマインツ大学の実習生でもあまり深くは関われないそう。

## 自己評価

今回の実習では積極的に英語で先生たちとコミュニケーションを取り、言語の壁に臆する事なく、疑問に感じたことは質問するという姿勢を貫いた。その甲斐あってか、徐々に先生方は深い知識を親切に教えて下さるようになり、実習をより有意義な時間にする事が出来た。海外のドクターと関係性を築くノウハウの一端に触れる事が出来たのは今後のキャリアにおいて非常に貴重な物になるだろうと感じている。また、反

省点としては、やはり医学英語が思い出せず、自分が話している途中にも関わらず調べるのに時間を要してしまう場面があった。将来、専門科を専攻してからはこのような事が無いようにしなければならないと思った。

### **最後に**

今回貴重な経験を積む機会をくださった坂口嘉郎先生、マインツ大学で面倒を見て下さった福井公子先生をはじめ、実習を援助・応援して下さった全ての方に深くお礼を申し上げさせて頂きたいと思います。1ヶ月の間大変お世話になりました。今後ともよろしくお願い致します。